

氣砲記

國友藤兵衛著

洋学文庫
文庫8
C 194



系炮
記



417 8075



氣砲記序

蘭名ウイニトルウル
俗ニ風砲ト云

曰升平久シトイヘトモ安メ不忘危ハ聖人之重戒也
故二人ニ不廢武術就中銃砲之伎最盛ニ行ハル種々
工夫便利ヲ盡セリ予嘗テ蘭人推メ来リシ気砲ノイヲ聞ニ
銃臺中ニ気ヲ集メ是ヲ銃筒ニ接續シテ折放之其銃力
三四分許ノ板ヲ九尺程ヘタテ試之鉛子忽板ヲ穿ツ勿論
火薬ヲ不用火繩ヲ不做誠ニ奇々妙々之術也然レ氏ヲ制



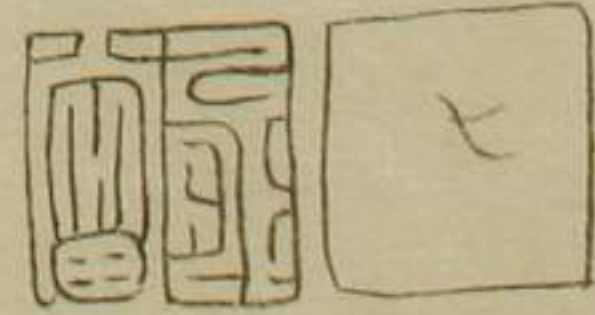
ニ發シテ氣皆散盡スニ發ハキ難ニ故民用ノ備ニテラフ
徒ニ小見ノ弄ニヒトシ海貝ニ不用ノ品ナリカレ余モ機巧ノ
術ニ惑シ者シコレニテ加ヘハ民用萬分之一ニモ神ト無ニモ
アラスト千辛萬苦モ理ヲ推窮ナリ且知巴ノ人山田大圃子ニ
謀リ蘭人舊制ノ上ニ別ニ新意ヲ加ヘ制作セリ今試ルニ
鉛子遠リ奔堅亦必貫キ放ノ數勝於蘭制數十倍云々
シ然レトモ是等ノ小伎何リ深リ論スルニ是ラニ故今此

書ヲ著述スルモ自ラ奇巧ニホクルニ非ス只近來此氣
砲ノ制ヲ聞傳ヘ來問フ人ニ門ニ滿リテモ對フニ暇
ナシ故ニ自ラコレヲ圖寫ニ四方好事人ノ求メニ應スト云
爾

文政二年春

江州

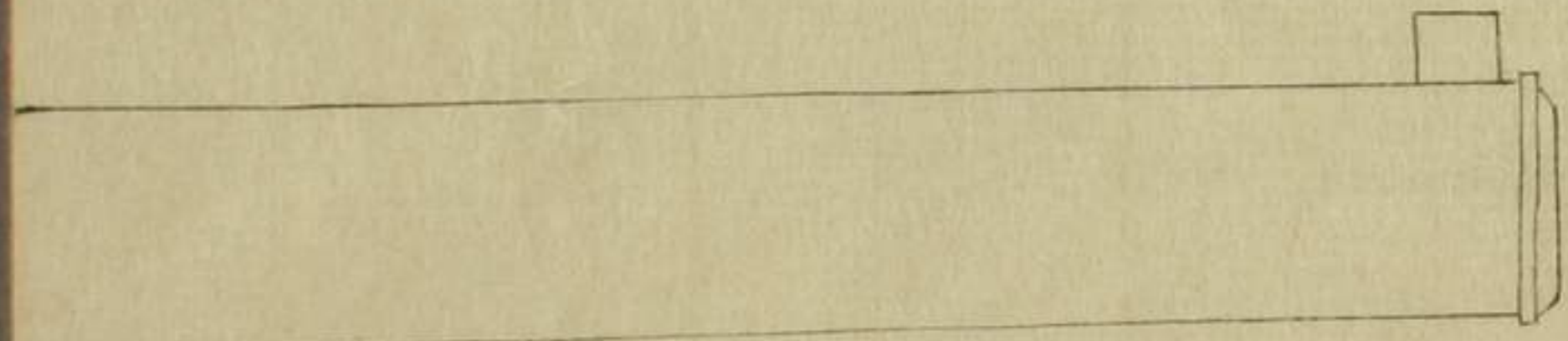
國友藤兵衛能当著



今ハ江戸四谷仲町ニ住シテ此炮ヲ制作シ
公ハ始テ奉リシト云是文政三年卯月ノ頃ノ由

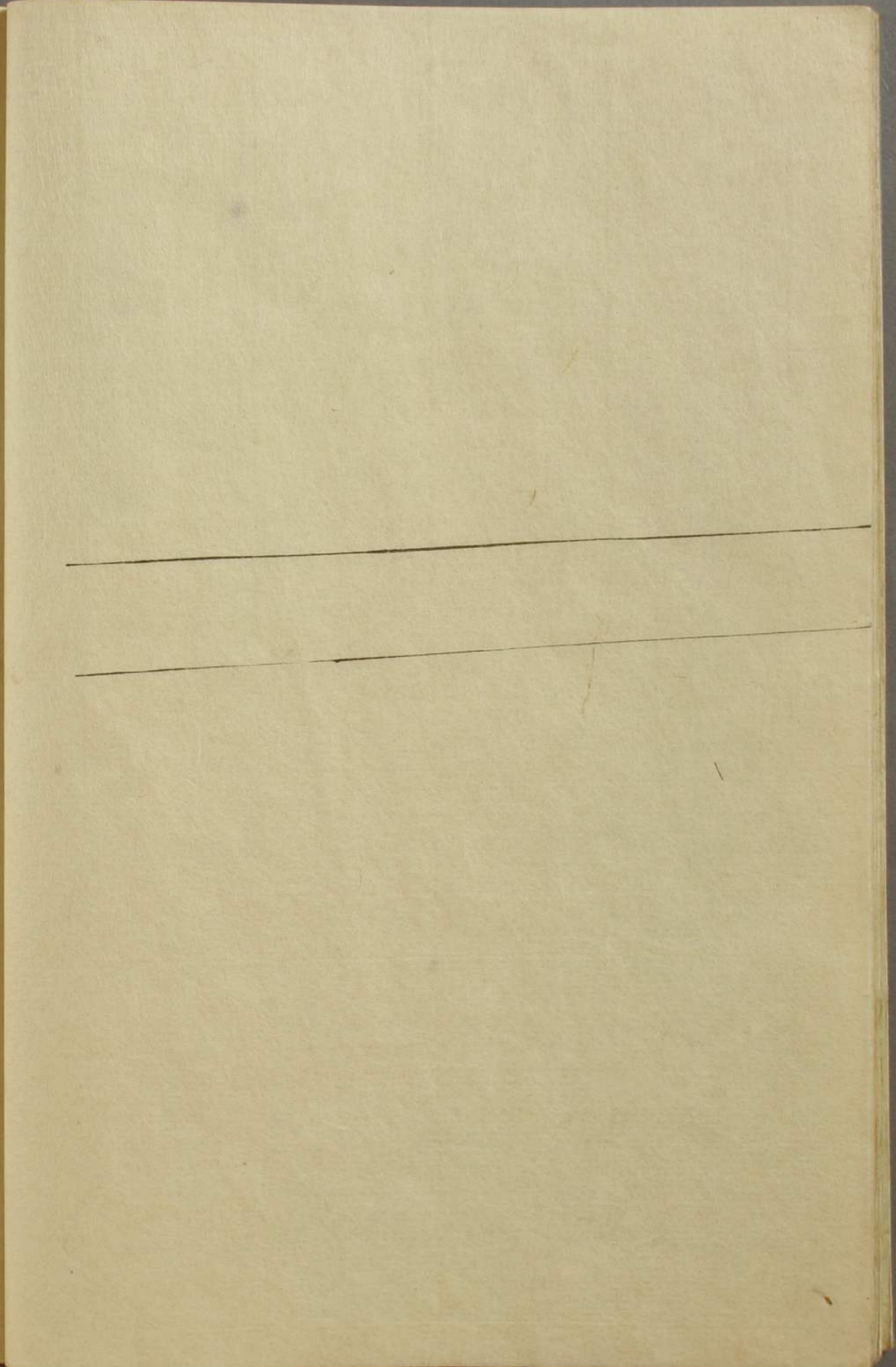
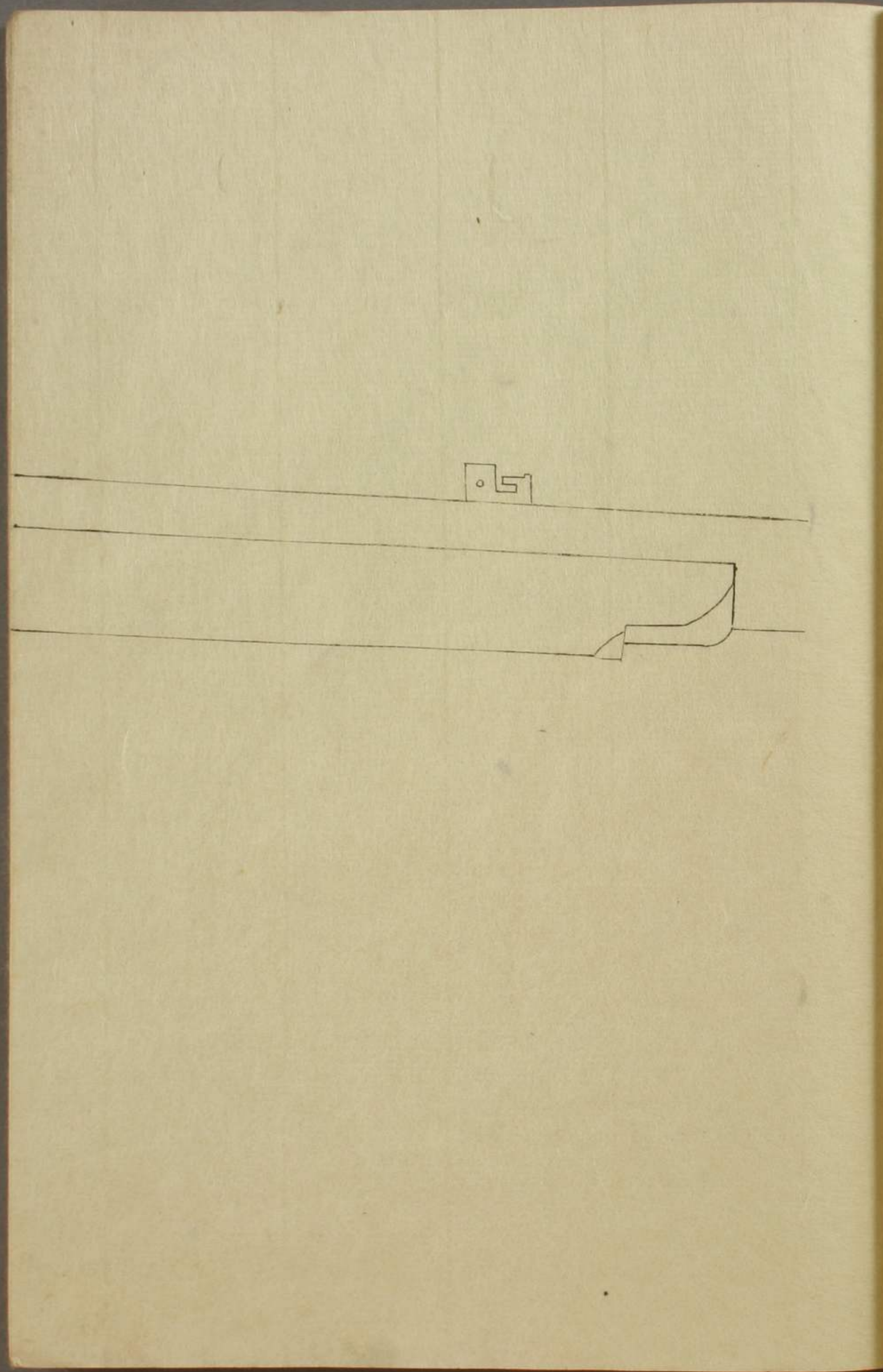
信好誌

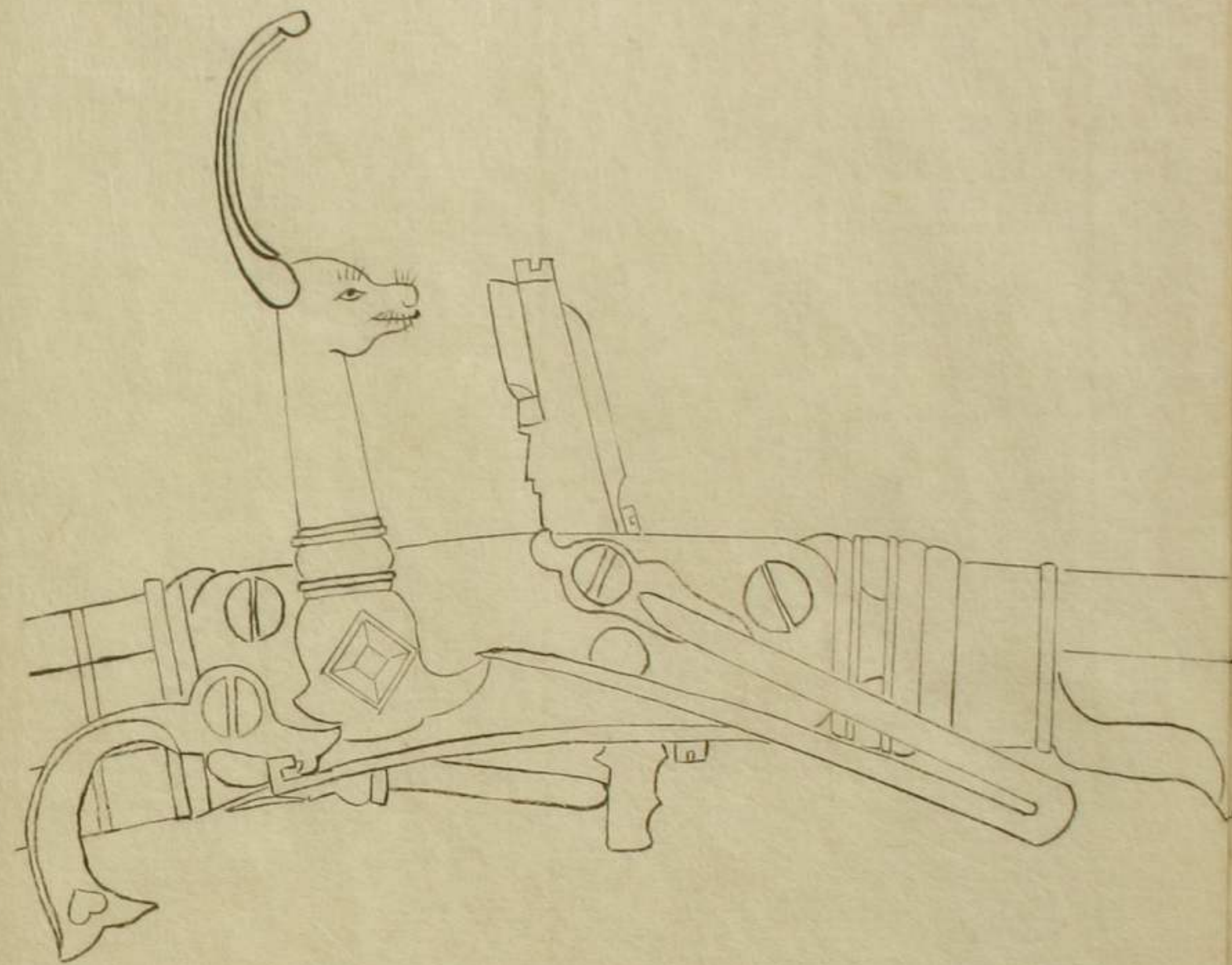
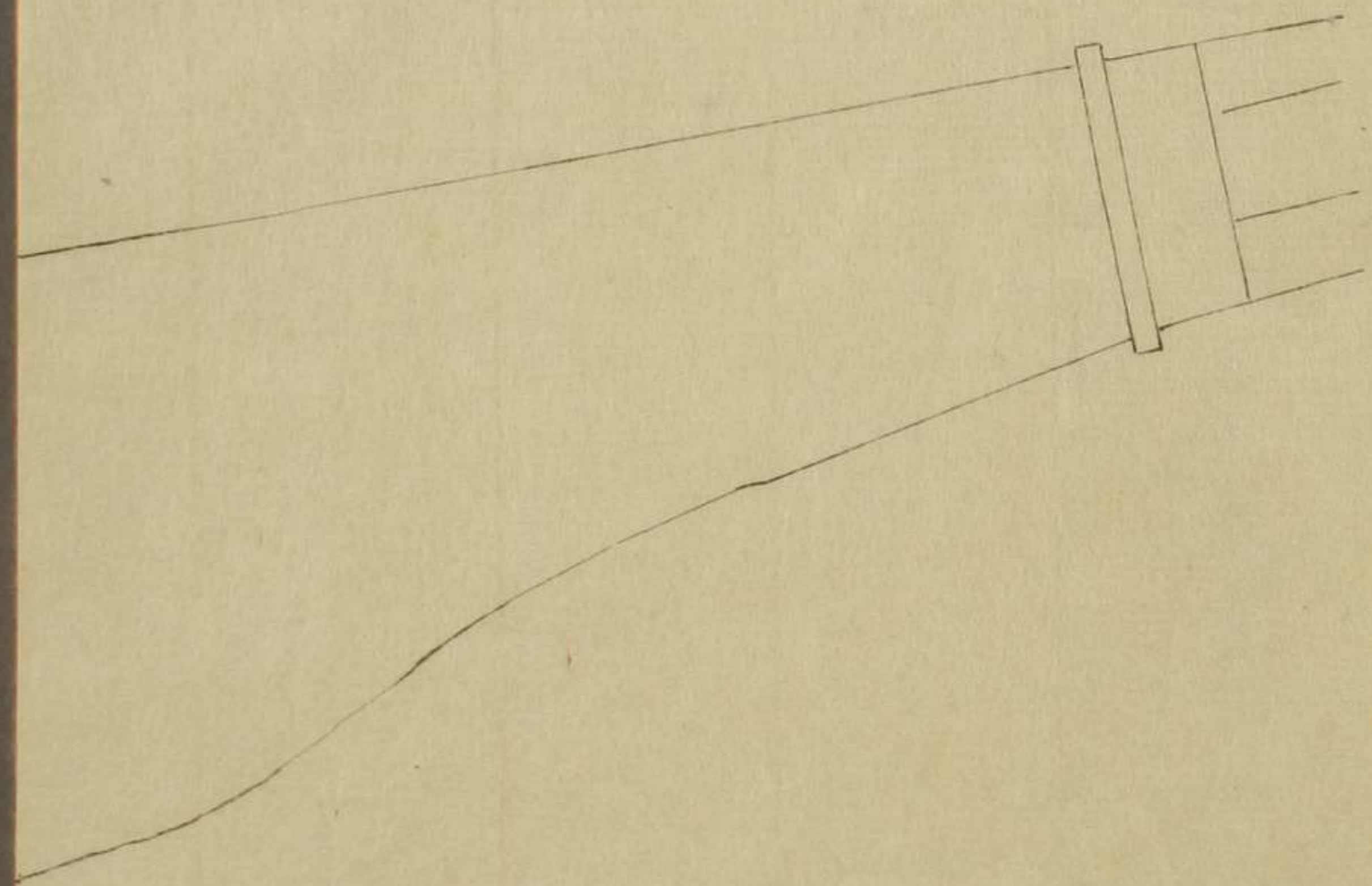
氣砲全備之圖



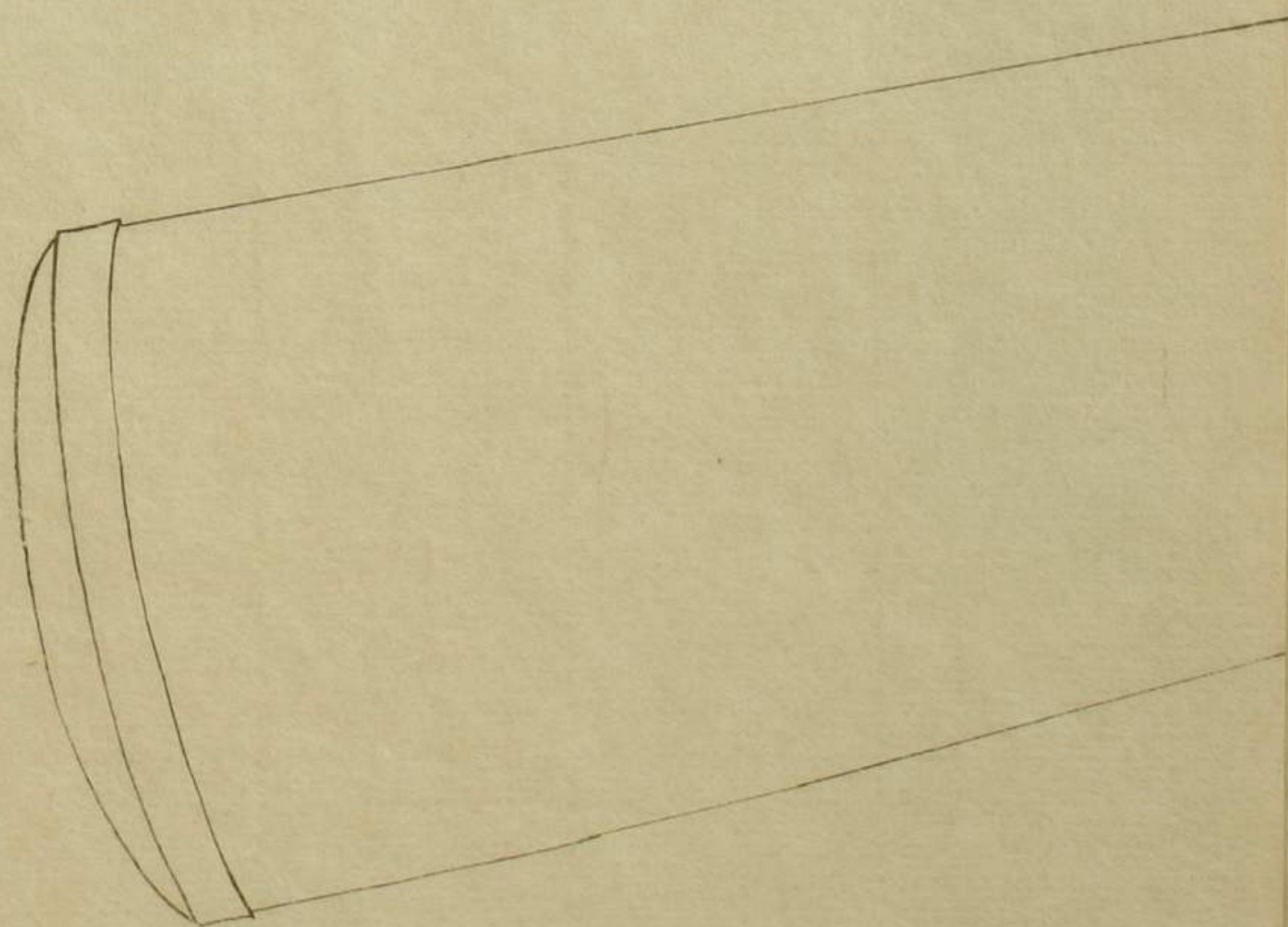
五

八



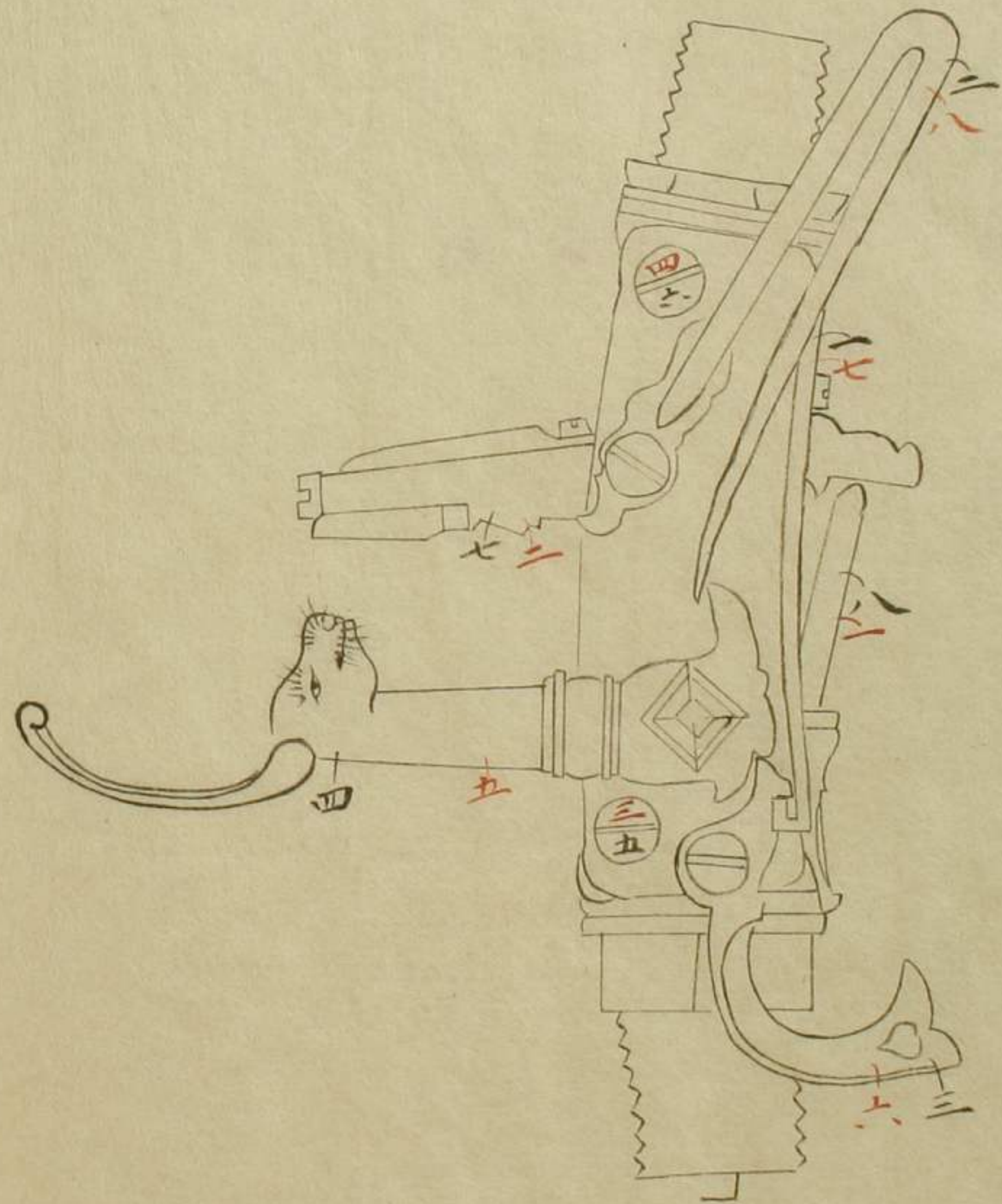


一 鉛子ヲ折放サ又時ムダニ引金ヲ掛ケ置キ事勿論
無氣ノ節或掛ケ或ハ落ス一ト大ニ銃筒ニ害アリ



銅金金具ノ圖

附取ハツシノ次第



一 墨土ハ取ハツシノ次第

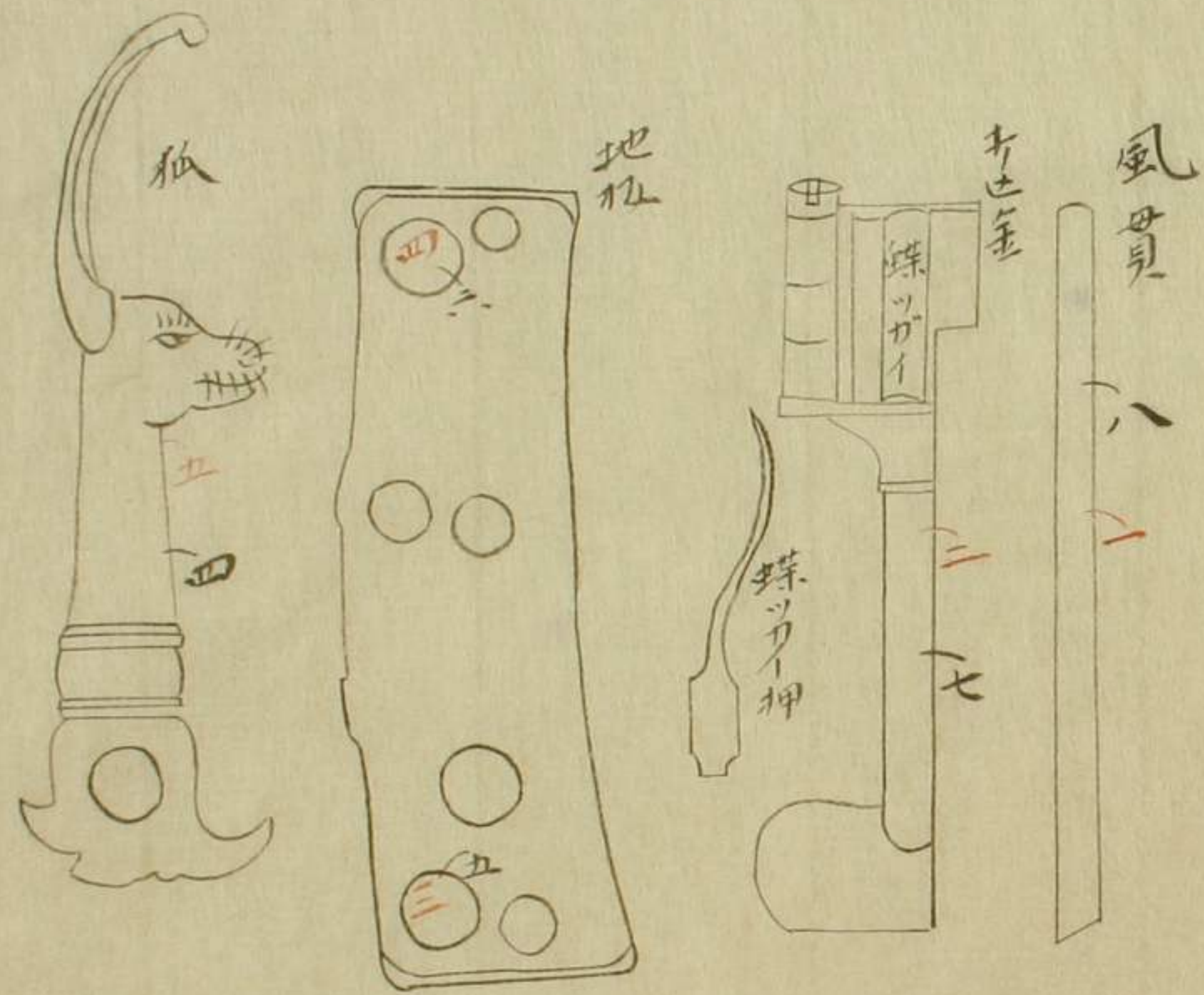
一 朱ハシリミノ次第

一 朱點橋油ヌル処

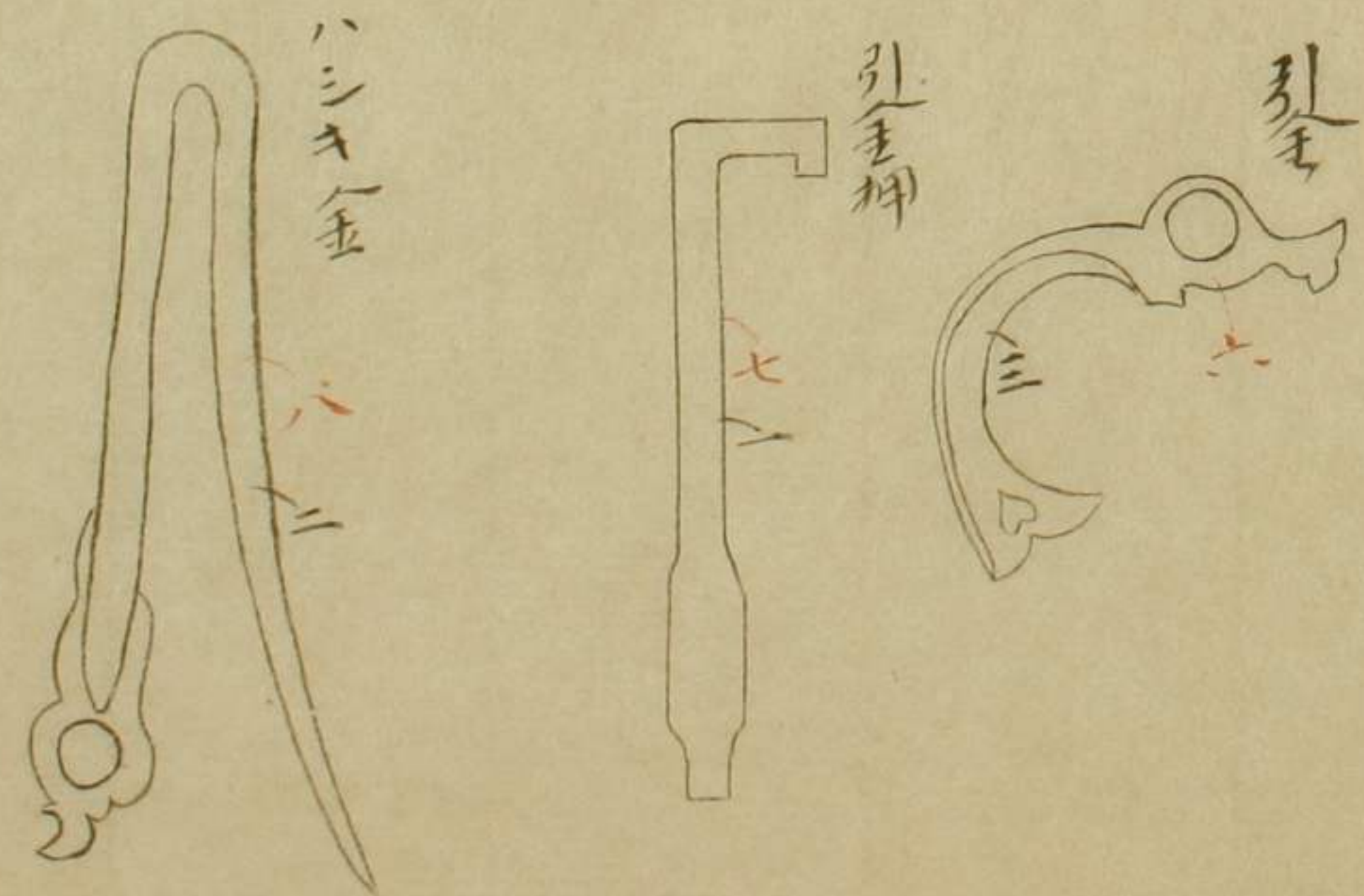
狐地板ノ合螺絲轉子狐トハジキ金ノ當田ル處コヨリニテ
油ヲヌル

一 剛鎖ニテ作ル

一 各螺絲轉ヲ用ニ螺絲轉ノ廻リ過不足スベカラス



金具取ハツシノ圖 内シリミノ深さ



一自然ニ螺絲轉戻リ金具ユルム才ハ儀シナル



此如生氣筒ノ螺ヲ取リ

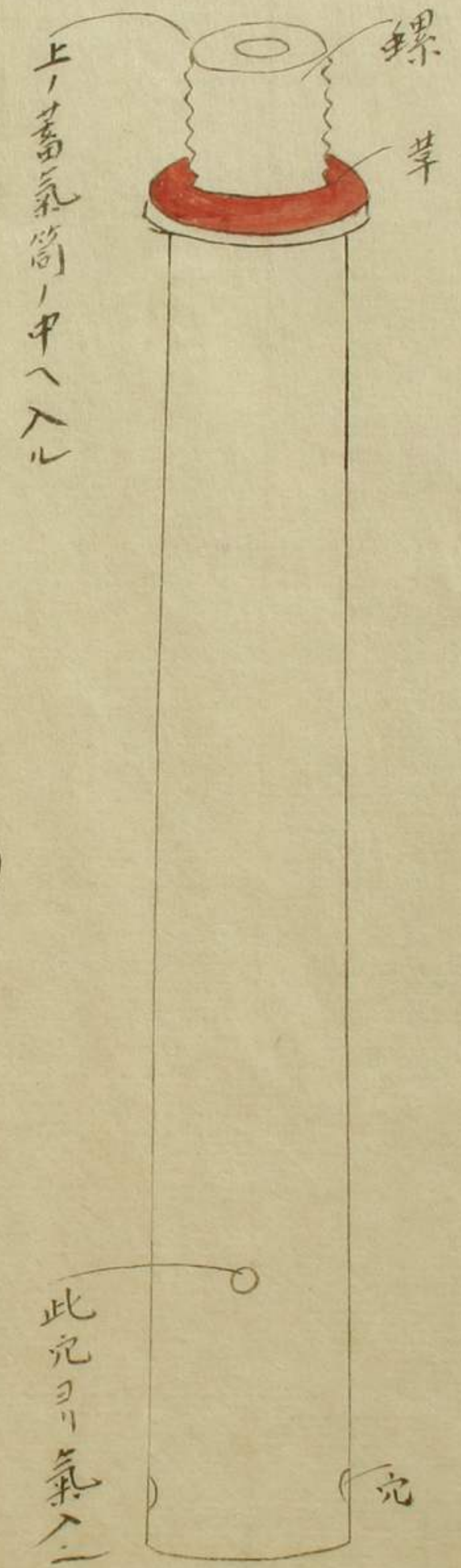
三度用ユレハ此穴へ
椿油ヲサス

蓄氣筒

氣ヲ蓄ヘヨリ器ニ

- 一 朱ハシクミノ次第
- 一 蓋トハハツシノ次第
- 一 不用ニ取ハツシ甚害アリ

生氣筒ノ圖



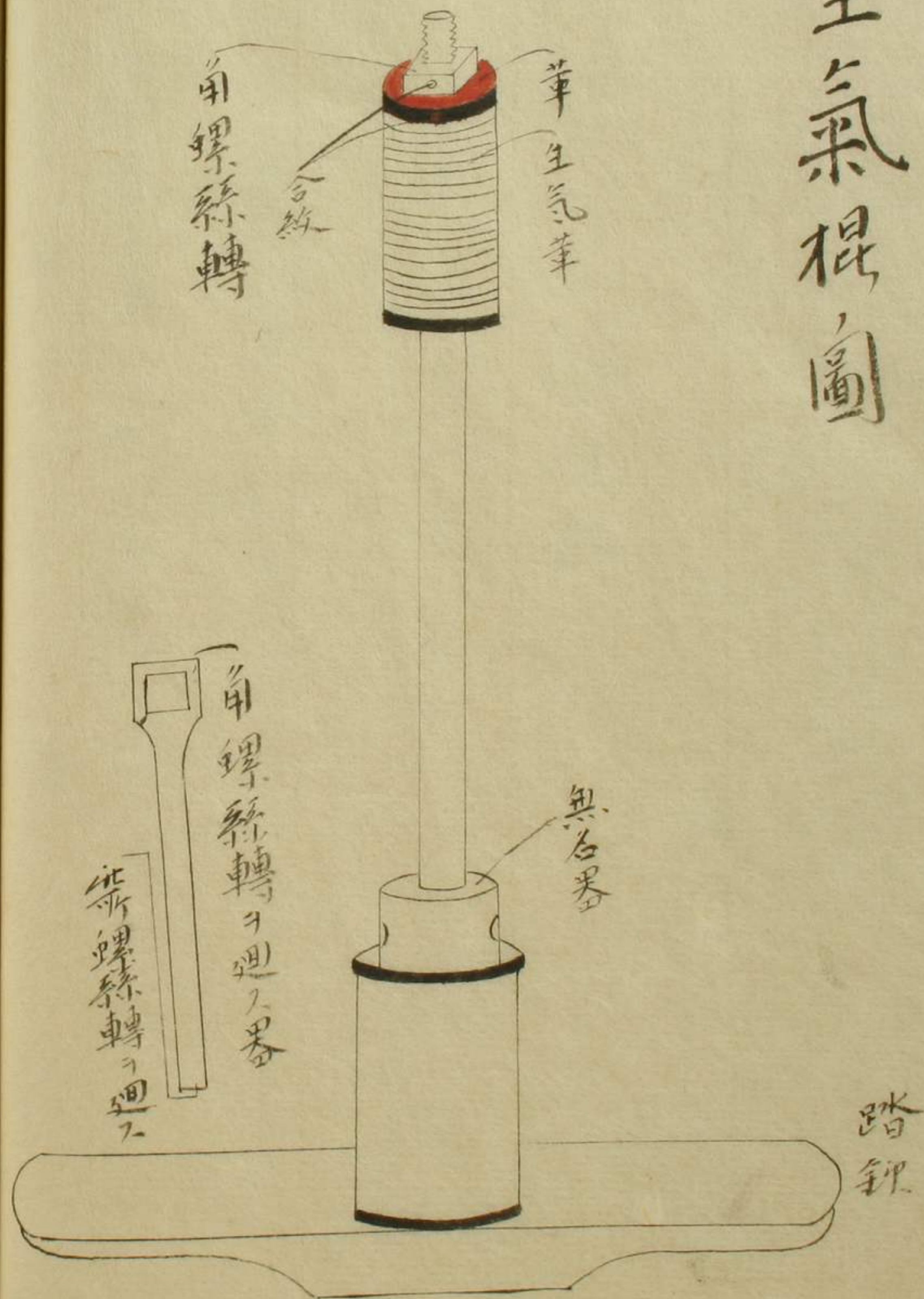
螺絲轉

一筒中塵ヲ入レサレヤウニスベシ
 一生氣棍ヲ此筒中へ入ル

一若無蒸ノ中へ生氣ヲ入レテ筒ノ中へ
 入レ定へ螺絲轉ヲサス

一生氣筒ノ螺ノ頭ヨリ用ユル毎ニ椿油ヲ
 リ・リ

生氣棍圖



一剛鍊三寸作ル

一生氣革ハ革ヲ二重ルテ敷放

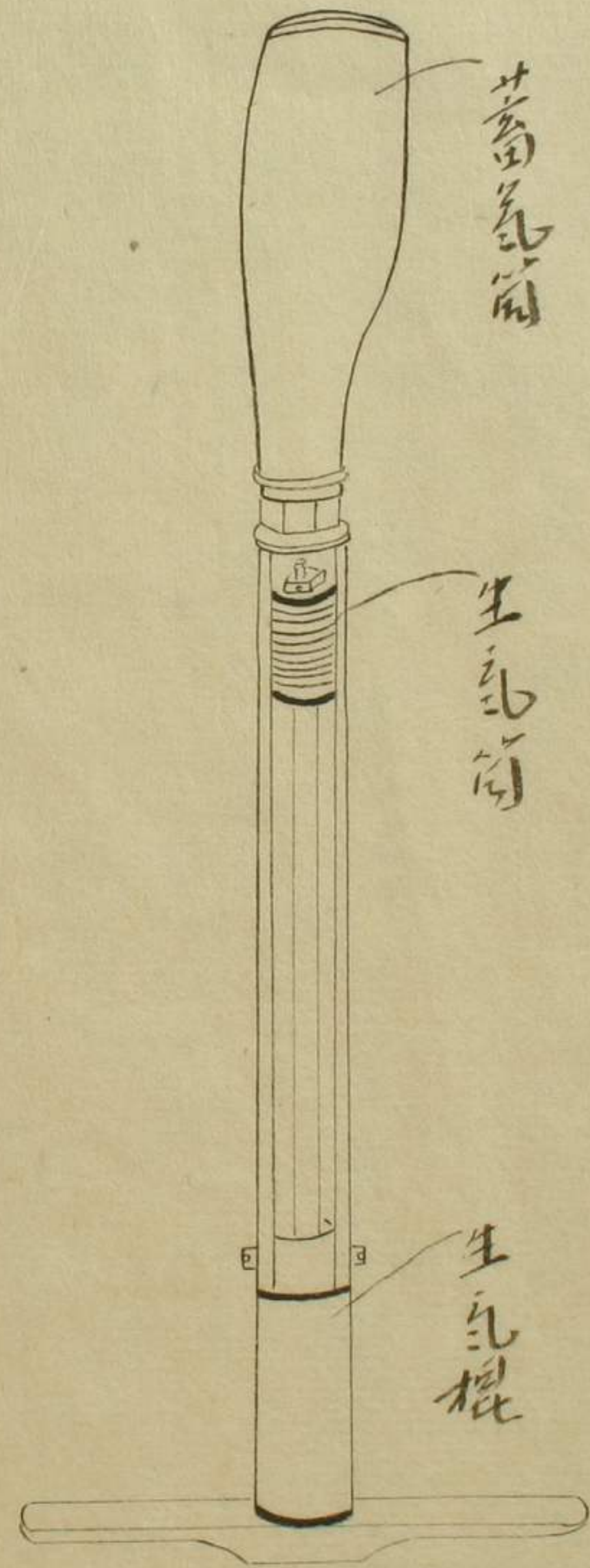
一螺絲轉へ伽羅ノ油ヲ又ル少キ寸ハ氣淺ルニ

一角螺絲轉革ヲ推入

一角螺絲轉ノ下ニ亦革也

一生氣棍ニルキ時角螺絲轉ヲ凡へ廻セハ堅シ右へ

廻ルニシテ左へハ氣淺レ堅ケルニ重シト下スルニ不自由



生気之法

一 生氣之流ハ向足ニテ珠在ヲフマヘ向チニテ蓄氣可
ト生氣筒ノ方ヲ極リ頸^上下スル^下ニ蓄ニテ下ヨシ
若上下スルニ筒稍ニ里キ免ユレハ向大カリを人ハ
下ヲ上ヘを人ハ向^上ニテ以手ニテ上下スベシ
一 生氣ノ方ハ二尺程ノ布ヲ上帯ニハサニ下ハ五ツニ
紐ヲツケ足ニ結ブ

一 折放スル法多クノメシ
 一 折放スルハ凡リノ子ニテ金具ヲ捲リ右ニシテ
 狐ヲ引ヲコセハ引毛カトヘカ、ル
 一 引ヲコセ引毛左ニ小指ニテ引上ケル此等心ヲ
 引スベシカ、リ浅ケレハアダヲチスベシ
 一 筒筆ニテ巻リテ放シ法不洗又不拭只木綿ニ
 拭回ヲ内々至善クシテフクヘシ



文政三年七月廿九日 砲工藤兵衛自携来リ小日向七郎を左
留高君ノ許ニテ存セシ以テ傍ニ在テ親ク見ルトイハ氏ヲ機轉ヲ
解カリシカバ向ハ日十二日 砲工ノ免ニ就テ自登シ試シテ二放也
共ニ中リシハ幸ヒニケリ此時ニ機轉ヲ願ルヲシケル如リトシ氏
筒中ノ巧ノ様ハ君ニ知ラズ

井上孫六郎信好誌

毎

此書天保十四年卯年四月十一日官本好間ニ懸ル

奥野政徳五

嘉永四年亥年四月 奥野政徳ニ借ラズ

鏡舶堂慮所

